HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ＪＡ女性組織における公益的活動の展開プロセスとその意義［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	小川, 理恵
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(農学)
Dissertation Number	甲第15751号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91874
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Ogawa_Rie_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学 位 論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称：博士（農学）　　氏名　小川理恵

審査担当者　主 査　教 授　板 橋 衛
副 査　教 授　坂 爪 浩 史
副 査　准教授　小 林 国 之（国際食資源学院）

学 位 論 文 題 名

ＪＡ女性組織における公益的活動の展開プロセスとその意義

本論文は序章・終章を含む７章からなり、図 11、表 35、参考・引用文献 40 を含む、総頁数 124 頁の和文論文である。別に１編の参考論文が添えられている。

ＪＡ女性組織は、農村部を中心とした女性のくらしと経済的社会的地位向上等の活動で成果をあげてきたほか、農産物直売所や高齢者福祉事業の土台となる活動など、農協事業の新しい展開の基礎活動としても機能を発揮してきたが、近年は活動の担い手の減少、活動内容のマンネリ化などの課題が指摘されている。とはいえ、地域農業・社会の諸課題への対応に主体的に取り組むことにより、組織活動を活性化させ、地域社会にとって重要な役割を発揮しているＪＡ女性組織もみられ、共益的活動（ＪＡ女性組織メンバー間の共通利益を追求する活動）から公益的活動（受益者の範囲が地域社会に及ぶ活動）へ、ＪＡ事業とは相対的に独立した公益性を強めた活動を行っていることに注目すべきである。

公益的活動に関しては、ＩＣＡ（国際協同組合同盟）が協同組合原則の第７原則で「地域社会への配慮」を謳っており、日本のＪＡグループでもＪＡ全国大会決議等において、地域との接点強化を掲げている。本論文では、公益的活動を積極的に展開するＪＡ女性組織活動の展開プロセスと活動を展開させた要因を、ＪＡの機能やＪＡ女性組織のメンバーの考え方の変化に着目して分析した。そして、ＪＡ女性組織の公益的活動の意義を明らかにするとともに、ＪＡ女性組織およびＪＡの公益的活動のあり方に示唆を与えようとするものである。

第１章では、公益的活動の視点からＪＡ女性組織の展開過程を整理した。ＪＡ女性組織立ち上げ当初の 1960 年代は、ＪＡの経営改善と女性の生活環境改善が主たる活動だった。1980 年代には高齢者福祉などのＪＡ事業と結びついた公益的活動が開始されたが、1990 年代になるとＪＡ女性組織メンバーの高齢化と多様化が進み、世代間などの考え方の相違を反映した多様な活動が進められる。そのため、地域社会対応への関心の低さや、地域活動に該当するＪＡ女性組織活動の少なさが今日の課題である。

第２章では、ＪＡふくしま未来・福島地区のＪＡ女性組織メンバーへの悉皆調査の結果から、活動に関する意識と行動に着目したメンバーの実像を明らかにした。メンバーが多種多様な資格や趣味・特技を有していること、ＪＡ女性組織活動への参加を通した社会貢献活動への意識が一定程度存在することを明らかにし、メンバーの資質や関心事を把握し、それを活動と結び付けることの必要性を示した。

第３章の事例であるＪＡみっかびでは、若い女性の関係性構築のためフレミズカレッジを設立し、若い世代がＪＡ女性組織活動に関心を持つ契機を創出し、フレミズグループと

しての自主的な活動を促進する支援をＪＡおよびＪＡ女性部が行っていた。その組織活動を通して、料理教室などの共益的活動から食農教育という公益的活動へと活動の幅を広げている実態と要因を分析した。

第４章では、ＪＡ高知県女性部大篠支部を事例に、ＪＡ女性組織活動が共益的活動から公益的活動へと自発的に展開するプロセスとメンバー個人の意識変化を明らかにした。同女性部では、従来の組織とは異なる班横断の組織を立ち上げ、全員が必ず役割を持つ決まりを徹底して共益的活動を行い、メンバーの参加意識の高まりから子ども食堂という公益的活動への取り組みの意思が芽生えていた。子ども食堂の取り組みは地域からの評価も高く、そのことがさらなるメンバーの活動意欲を高めていた。

第５章では、ＪＡ女性組織を牽引するリーダーの実態を、ＰＭ理論を用いて検討した。その結果、ＪＡ女性組織という基盤があるため、集団の維持を図るM行動に重きが置かれていたことが明らかとなったが、変化や決断の場面では課題の達成に直結するＰ行動が実行されていたことも注目され、事例ＪＡ女性組織ではリーダー行動が適切にとられていたことを確認した。

終章では、以上を要約したうえで、ＪＡ女性組織活動が公益的活動に展開するプロセスについて、その要因を分析した。第１はメンバーの多様性を考慮・理解した今日的な新たなＪＡ女性組織づくりとメンバー間の関係性強化が重要である。第２はメンバーの個々の能力を正しく把握し、それぞれの活動に対する思いを形にする組織活動の実践である。第３はＪＡとしての特色を発揮した地域諸組織との関係性の強化である。第４はリーダーのあり方であり、集団維持を重視しつつもリーダーの決断も必要である。第５はＪＡのあり方であり、女性組織を育成する一方で自主的な活動を尊重して支援する対応が必要である。

以上のように、本論文ではＪＡ女性組織を対象として、共益的活動から公益的活動へと展開するプロセスについて実証的に分析し、その要因を明らかにした。地域を基盤とした事業活動を行うＪＡは地域社会における役割発揮が求められるが、経営悪化や人員不足により必ずしも公益的活動を実践できてはいないのが現状である。その中で、ＪＡ女性組織の取り組みが地域社会におけるＪＡによる公益的活動を補っており、地域におけるＪＡへの存在評価、メンバーの成長を通したＪＡ女性組織の活性化につながっている実態を本論は明らかにした。これは、今後のＪＡの事業やＪＡ女性組織の活動のあり方に示唆を与えるものとなっている。

よって、審査員一同は、小川理恵が博士（農学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認めた。